

東方三界黃龍伝

短編『夜明けの海』

小龍

「夜明けの海を見に行こう」と同居人が言った。「いまから！」と満面の笑顔で。

いったいなんの冗談だ。

いまは真冬の一月で、今夜は雪の降りそうな気温（事実、今週末には大きな寒波がくると天気予報は言っている）なのに、電気は止められており、僕らは朝からなにも食べていない。この分だと、餓死が先か、凍死が先かは微妙なラインである。

僕は隙間風がそこかしこに吹いている家の中で一番上等のコートを着て、なるべく動かないようにしている。体力温存のために。

だから、断固としてこの同居人の馬鹿な提案は却下するつもりだったのだ。

「い、や、だ」

相手は半分外国人なので、きつぱりはつきり端的に意思表示をしたほうがいいのは学習済みである。日本的な微妙な言い回しは通じない奴なのだ。

「えー、行こうよー。楽しいよー。いまから歩いていけば明け方にはショーナン

くらいには着くと思うし。海辺のオレンジ色の空は、綺麗だよー」

この同居人は日本名を甲斐馨、中国名を李沙龍リーシャロンという。なぜ日中二つの名前があるのかというと、簡単な話で、両親は日本人なのだが、本人は中国で生まれ育ったからである。結果、日本人らしからぬ、国籍不明の人間ができあがった。

「ねー、行こうよー、キサさん」

「い、や、だ」

「えー、行こうよー」

僕は、この同居人が人の話を聞かない奴で、なんでもかんでも力技で解決しようとする人間であることも知っている。

だが、いつまでもそのゴリ押しが通用すると思うなよ。

特に、今回、この貧困の原因を作ったのは百パーセント彼女なのだ。

同業の宇佐美さんから『東新宿探偵社』始まって以来の「やばい仕事」が持ち込まれたのは二ヶ月前のことだった。

なんでも歌舞伎町を根城にする中国マフィアに監禁されているはずの人物を救い出してほしいという、コロンビア人からの依頼だ。

もうこれだけでもやばい空気がひしひしと伝わってくるだろう。

監禁されているのはコロンビア・カルテルの大物である。要するに、中国マフィアと南米勢力の泥沼抗争の末の誘拐だ。

あの狭い歌舞伎町の中で、彼らはここ数年、睨み合っている。

日本のヤクザたちは暴対法の煽りを食らってナリを潜め、戦後ずっと支配していたこの地を、半ば手放している状態なのだ。

東新宿探偵社にやってきた浅黒い肌のコロンビア人は、ボスを助け出ししてくれるなら手段は問わない、と言い、もし生きた状態で助けてくれたら報酬は一億出す、と約束した。

当然、警察の手出しできない案件で、下手すればこちらの命がない。危険は承知で始めた興信所だが、やはりこの依頼だけは受けるべきではなかった。

結果だけを言うと、馨は見事にその監禁されているコロンビア人を「alive」の状態を取り返してきたのだが、その際に二十階建てのビルひとつをぶっ壊し、

事件とはまったく無関係のそのビルのオーナーに損害賠償請求をされたのが、いま、僕が家の中でコートを着ている理由である。

報酬の一億は泡と消えた。だいぶ足も出た。だが、本来なら、十億二十億とふんだくられるところを、馨の働きに感謝してくれたコロンビア人の大物が、そのビルのオーナーと話をつけたおかげで、それ以上の請求はなかった。

ただ、もろもろの支払いをすべて済ませると、電気代を支払う金も残っていない。暗く、寒い家で過ごす僕たちに正月などなかった。蕎麦も餅もなく、お茶漬で年越しをした。

「行きたいならひとりで行ってくればいい」

僕は頑なにそう言い張った。

「ひとりで行くのは意味ないんだってば……。ねー、行こうよー。どうせ仕事ないんだしー、ヒマだしー、歩いて浜辺に行くだけならタダだしー」

馨はこの寒風吹きすさぶ家の中で、半袖のTシャツを着ている。

バカですか？　と言いたくなる。

まったく、体感温度がおかしいんじゃないか。

冬でもランニングシャツの小学生か。

「僕が行かない。いまだって、別にヒマなわけじゃない。仕事の電話待ちをしているんだ。このまま依頼がなければ、僕たちは飢え死か凍死だからな。いまから遺書を書いておけ」

本当言うと、僕のへそくりが幾らか残っているはずだし、馨も本当はものすごい額の口座を持っているのは知っている。

しかし、普段の生活に貯金を使うのは僕の流儀ではないのだ。それを馨にも守らせている。

「こんな夜更けに依頼の電話なんかどうせ掛かってこないって」

「そんなことはない。確か、女性のすすり泣く声で『助けて』って電話が前にあった。なぜかすぐ切れちゃったけど」

「それは自殺を止めてほしい人が『いのちの電話』と間違えて掛けてきたやつか、既に肉体を持ってない人なんじゃ……」

「でも、そういう依頼は確かにあるんだ。『暴力を振るう恋人と穏便に別れさせ

て欲しい』系の」

一日一万円くらいにしかならない単発仕事だろうが、いまは選り好みはしてられない。

どんな安い仕事だろうが二十四時間受け付けている。

仕事、仕事、仕事ー！

仕事、クレーー！

「だからあ、そういうキサさんの下ばかり見てる視線を上に向けようって話なのよー」

「別に下を見ているわけじゃない。僕が見ているのは電話だ。電話が上に置いてあるなら上を見る」

「いや、そういう話じゃ……」

口喧嘩では馨は僕に勝てない。

日本語がネイティブでないからというのは大した問題ではなく、たとえば僕が中国語をスラスラ喋れたとしても、この関係は変わらないんじゃないかと思う。

ただ、悲しいかな。口喧嘩と家事以外では、僕はこの同居人に勝てる要素がひ

とつもない。だから、まあ、僕が馨に勝てないのは分かっているのだ。

腕力云々ではなく、地球滅亡一分前だろうが決してへこたれない、この脳天気に勝てる人間はまず居ないだろうと思う。

「で、どこに行きたいって……？」

その三十分後、僕らは歌舞伎町の端っこにある中華料理店で一日ぶりの食事にありついていた。

馨の馴染みの店で、閉店間際だったのだが、馨が店主となにやら中国語で早口でまくしたてて、話がついたらしい。たぶんツケ払いでいい、ということだろう。

いつもすぐ「お腹がすいた」と言い出し、人の三倍は食べる馨が、今日はなにも文句を言わずに僕の絶食に付き合っていたのは、今回の件に多少なりとも負い目があるからだろう。たぶん。……きつと。

「助かったよ、ありがとう」

本当は泣きそうになっていたが、極力素っ気なく、ついでのように言った。熱々のタンメンが臓腑に染みるのだ。空腹のせいでめまいと絶望感に襲われていたところに、この素朴なラーメンは極楽すぎた。

馨は三口くらいで井ぶり一杯のタンメンを小さな体に流し込み、既にお冷ひゃをちびちび飲んでいた。

「キサさんはさ、もう少し人に頼ることを覚えたらいい。誰かを頼りにするのは別に恥ずかしいことでも弱さでもないよ。むしろ人脈とか人徳のない人にはできないんだから、『こんなにも人脈のある俺、すげー！』って思ってたらいいいじゃん」

「君のそういうところは素直にすごいと思うよ」
「ここらへんは文化の違いもあるんだろうけど。」

馨の考え方はたまにすごく合理的だ。

そうして腹のふくれた僕らはトボトボと歩き出す。が、当初から「ショーナンに行きたい」と言っていた馨には現実をつきつけなければなるまい。

「湘南まで何キロあると思ってた。五、六十キロはあるんだぞ」

現在は深夜零時過ぎ。

人の歩く速さはだいたい時速四キロ。

それを五十キロ歩こうというのだから、サクサク歩いたとしても十二時間以上かかる。

そう言ったら、

「なんなのこの歩く計算機。分かったよ。じゃあ、日の出が見えるまでに到着できる海辺に行こう。はい、計算して」

「……ってことは『浜』は無理だ。東京湾で妥協しろ。しかも羽田あたりが限界だ」

「空港か。それもいいかも」

ということをやっぱり歩くことになってしまった。この真冬の極寒の東京を！僕も馨も都内の地図はほとんど頭に入っている。なので、歌舞伎町を出てからはほぼ迷わずに直線コースで南下した。

具体的には、新宿御苑の西側を通って千駄ヶ谷まで出たあとは、外苑西通りを西麻布まで下って細い道をちよこちよこショートカットしながら古川橋まで出

る。魚籃坂を下って泉岳寺まで来たころには僕は寒さと疲労でハイになっていて、「殿、吉良の首を取って参りました！」とか言ったりしていた。

品川駅を横切ればもう東京湾は見えってくる。湾沿いをぶらぶら歩いて海浜公園に到着。

日の出までは少し時間があつた。

朝の六時だというのに、目の前の羽田空港では飛行機の離着陸があつた。

いまも一機降り立ったところである。

「あ、カンタスだ。ようこそー日本へー！」

同じくハイになった相棒がそんなことを叫んでいた。

あの垂直尾翼のカンガル―は目立つ。

映画『レインマン』の中でダステイン・ホフマンが「事故を起こしていない」と言っていた航空会社だ。(注1)

「馨が来た頃は、羽田はまだ国内線オンリーだった？」

「うん。降りたのは成田だったよ」

「そうか」

「あの頃は日本語がよく分からなかったから、羽田と成田っていう文字を見て、『田』は日本語では空港に関係する字なのかと思ったね」

「ああ、そういうへんな勘違いってあるよな」

「あと、勘違いしてたのが上^{サン}ね」

「さん？」

「日本語って、井上さんとか、村上さんとか、上^{うえ}の字がつく人、多いじゃない？で、中国だと上^{うえ}はサンって読むんだよ。そうすると、さんが敬称なのか名前の一部なのか分からなくなる」

「……」

あれ？　なんか引つかかるな、と思ったら、なんのことはない。

僕がずっとなんとなく違和感を感じつつも、敢えて聞かなかったあの最大の疑問だ。

「もしかして、馨は僕のことをキササンという名前の人だと思ってたのか？」

「うん、最初はね」

道理で!!

まったく敬意が感じられないのにしつこく敬称つけるよな、こいつ!! って思ってた謎が三年目にしてやっと解けた。

誰も居ないので、芝生に仰向けに寝転び、夜明け前の紫ともオレンジともつかぬ色の空を眺める。

来てよかったとは決して思わないが、冬の朝焼けは色んなものが寒さに誤魔化されて二割くらいはマシに見える。

そのうち水平線に顔を出した太陽が、よわよわしく昇ってくる。

日の出を見に来たはずなのに、メインイベントはあっさり終わったし、特に感慨もなかった。

「さっき言ってた話だけど」

「ん？」

「日本には『武士は食わねど高楊枝』ってことわざがあるくらい、やせ我慢がいとされる風潮があるのはなんでだろうなって思ってた」

「ああ、サムライの話ね」

と、馨は日本人の気質をいつもその言葉にまとめる。

「結局、それでもギリギリ生きていける余裕があったからってことじゃないかと思うんだ。庶民が貧しく生きていけない国には、そういう清貧を美德とする土壤は育たないんじゃないかって」

「そうだねー。なんだかんだ、日本は豊かだからねー」

「うん。だから、外敵が居ないって大きいんだな、と。ただ、島国だからこうなったってわけでもなくて、イギリスは同じ島国なのに外敵だらけだったから、まあ、立地だよな」

フツツと馨が笑った理由がすぐには分からなかった。

少し考えてみて「この分析好きめ」とでも思ったのだろう、と分かった。

しかし、寒いな。このままここに居たら凍死してしまう。

家に帰っても寒いのは変わらないので、

「あったかい山手線でしばらく寝てから帰ろう」

そんな提案を試してみた。

すっかり忘れていたのだが、その日は我が『東新宿探偵社』が誇るエース、鈴木千春が出張から帰ってくる日だった。

発端は元芸能人の妻からの不倫調査依頼だったのだが、担当した鈴木が調べていくうちに会社員の夫の背任行為（要するに会社の金の使い込み）も発覚し、会社側に（下心があつて）それを『お知らせ』したところ、会社側からも依頼があり、背任行為の証拠集めもすることになったのである。

結構な額の成功報酬と共に帰還した鈴木は僕らふたりに熱烈歓迎をされることになった。これで電気代を払うことができる。

さらに鈴木はやつれた僕らを見て、気の毒に思ったのか、焼肉もおごってくれた。鈴木様様である。

いや、馨流に言うなら、鈴木を事務所にスカウトした僕に先見の明があつたってことだろう。

（終わり）

(注1) ……映画封切りの一九八八年時点でジェット機の墜落事故がないというのは事実だが、小型機の死亡事故はある。さらにこの物語(二〇〇〇年)の時点ではカンタス航空は羽田空港に実際には乗り入れしていない。